

II

学校における がん教育の基本的な考え方

1 学校におけるがん教育の目標

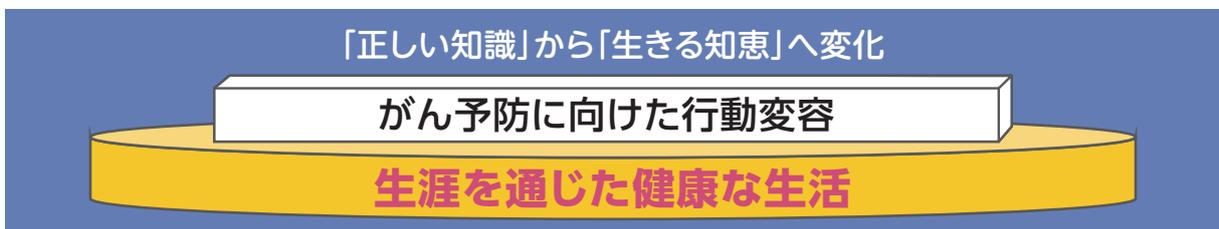
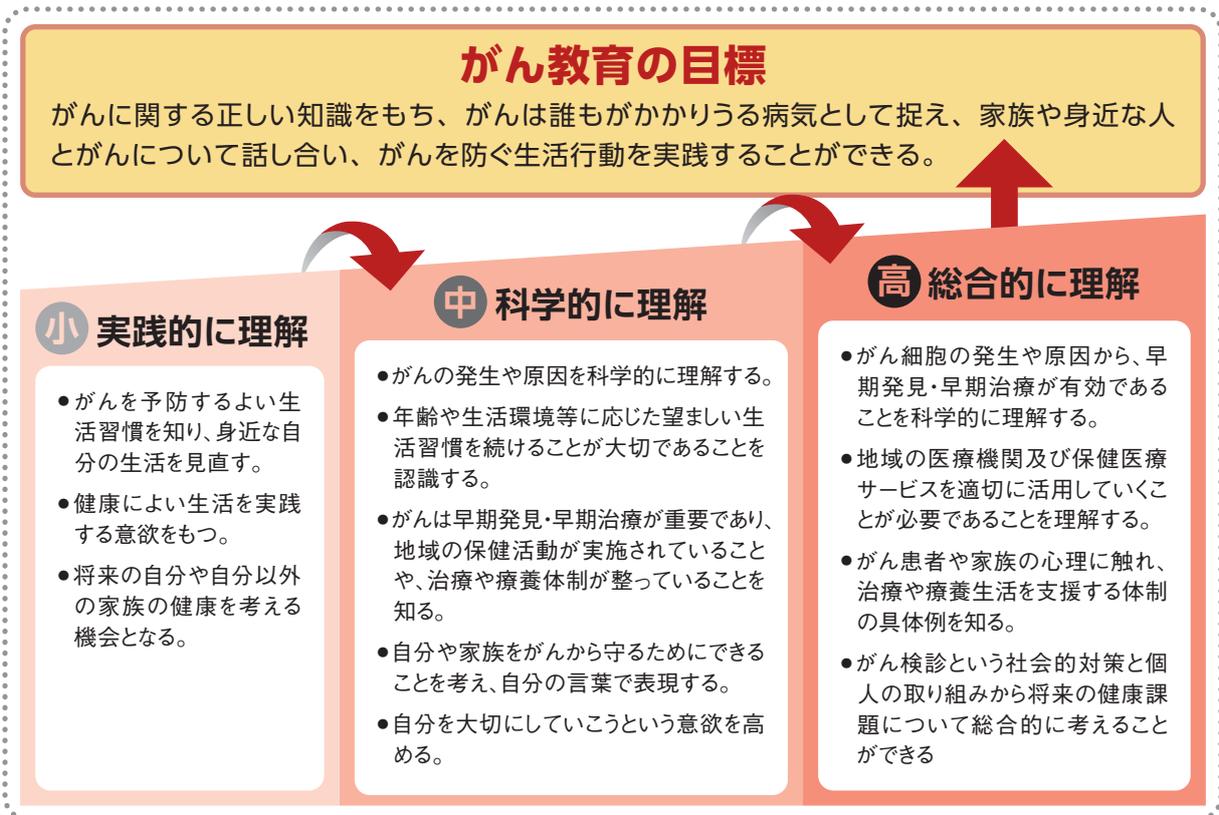
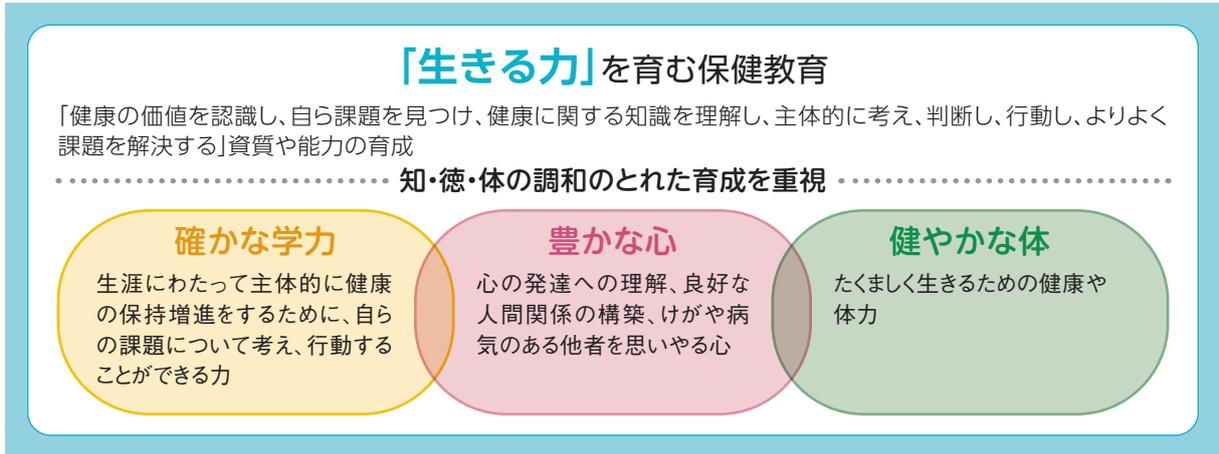
小学校から高等学校までの学習活動を通じて、がんに関する正しい知識をもち、がんは誰もがかかりうる病気として捉え、家族や身近な人とがんについて話し合い、がんを防ぐ生活行動を実践することができる。

- ① がんは身近な病気であることや、がんの発生と原因を科学的に理解する。
- ② がんと生活習慣の関連やその他の原因を理解し、がんを予防する具体的な生活習慣について自分の課題を見付ける。
- ③ 早期発見の有用性と保健・医療制度を知り、適切に活用していくことができる。
- ④ がんの予防や治療、療養生活を支える様々な職種の役割を知る。
- ⑤ がん患者の心や身体の変化を理解し、自分や家族ががん患者となった場合の対応を考えることができる。

2 発達段階に応じたがん教育のあり方

1 全体イメージ

がん教育は、がんというひとつの疾患に特化した指導です。保健学習や保健指導で学んだ知識を児童生徒自身が自分の生活と照らし合わせ、さらに自分の生活に具体化することで、「正しい知識」が「生きる知恵」に変わることをねらいとしています。



2 小学校における指導のあり方

小学校

3年生

自己の生活習慣に関心を持ち、意欲的に日常生活や学習に取り組もうとする時期である。この時期に、毎日を健康に過ごすには、1日の生活リズムに合わせて、調和の取れた食事、適切な運動、休養及び睡眠をとることが必要であることを理解する。

がん教育では、がんを予防するよい生活習慣を知ることによって自分の生活を見直し、健康により生活を実践する意欲をもつことができるようにする。

6年生

自己の生活の充実と向上にかかわる問題に関心を持ち、自主的に日常生活や学習に取り組もうとする時期である。また、高学年になると、喫煙や飲酒に興味をもつ児童も出てくる。

がん教育では、望ましい生活習慣について確認し、さらに、がんは生活習慣がすべての原因ではなく、その他の原因（病原体、体の抵抗力、環境など）があることを理解する。また、学校の検診と同じように、地域には保健活動としてがんを見つける検診が行われていることを理解する。

それらを理解した上で、毎日の生活習慣を見直し、自分たちができることを考え実践する意欲をもつことができるようにする。さらに将来の自分や自分以外の家族の健康も考えていくことにも触れるようにする。

3 中学校における指導のあり方

中学校

3年生

中学時代は、子どもから大人への過渡期であり、身体的・精神的に変化の激しい時期である。この時期に心身の機能や発達、心の健康について理解を深め、生涯を通じて積極的に健康の保持増進を目指す態度の育成に努めることが大切である。

がん教育では、がんの発生や原因を科学的に理解し、生涯を通じた健康の保持増進には、年齢や生活環境等に応じた望ましい生活習慣を続けることが必要であることを認識する。

また、がんは望ましい生活習慣だけでは予防できない個人の要因や環境、感染などその他の原因があることを理解する。予防できずにがんが発生した場合は、早期に発見することが重要であり、地域の保健活動として様々ながん検診が行われていることを理解する。また、がんの治療や療養生活を支える体制が充実していることを知る。

それらを踏まえ、がんを自分のこととして捉え、自分や家族をがんから守るためにできることを考え、自分の言葉で表現できるようにする。がん教育を通して「いのち」の尊さを学び、自分を大切にすることができる。

4 高等学校における指導のあり方

高等学校

2年生

高校時代は、個人生活及び社会生活における健康・安全について総合的に理解することで、現在及び将来の生活において、自らの健康管理や健康的な生活行動の選択及び、健康的な社会環境づくりなどが実践できるようになるための基礎としての資質や能力を育成する時期である。

がん教育では、がんの発生や原因から、早期発見・早期治療が有効であることを科学的に理解する。また、地域の医療機関及び保健医療サービスなどを適切に活用していくことが必要であることを理解する。

肺がんになった患者と家族の体験談を通じて、がんの治療や療養生活を支える体制や様々な保健活動や対策などの具体例を知る。その際、がん患者とその家族の心や体の変化に触れ、疾病の症状や有無のみを重視するのではなく、生活の質や生き甲斐を重視した健康のあり方について知る。

それらを踏まえ、がん検診という社会的対策と検診を受ける個人の取り組みから将来の健康課題について総合的に考えることができるようにする。